



Newsletter

NO.42

March 2018



鹿児島高等農林学校 昭和4年の得業記念植樹碑

鹿児島大学の前身校の一つ、鹿児島高等農林学校の卒業記念植樹碑。
前面に「昭和四年得業生記念樹」、裏面に「COCOS DATIL DRUDE ET GRISEB. ARGENT」と刻む。
2017年に総合研究博物館常設展示室横に移設。

contents

ANeT-アジアのアリ研究者ネットワークのセミナーに参加して	福元しげ子 (2)
鹿児島高等農林学校の得業記念植樹	上村 文 (4)
総合研究博物館における魚類学にかかわる2017年度の研究活動	本村 浩之 (8)
諏訪考古資料コレクション3 -松木菌式土器-	橋本 達也 (12)
大正時代の顕微鏡 -七高と高農資料-	橋本 達也 (13)

ANeT-アジアのアリ研究者ネットワークのセミナーに参加して

福元しげ子（総合研究博物館）

私のANeT（Network for Asian Myrmecology）セミナーへの参加（2013～2017年）のきっかけは、鹿児島大学理工学研究科前期課程の社会人入学で山根正気先生（鹿児島大学名誉教授、元館長、博物館の研究協力者）にご指導いただいたことに始まる。ANeTはアリだけに限った研究者の組織である。この組織の創立に参加された山根先生、橋本佳明氏（兵庫県立人と自然の博物館）を通じてANeTについて知りえたことや参加の感想などを述べてみたい。

ANeT創設

ANeT創設に到るまでを語るには、1980年代に実施されたスマトラ自然研究（SNS）にさかのぼる必要があるという。また、この研究チームの一員として参加された井上民二氏（当時京都大学講師、熱帯生態学；1997年飛行機事故で急逝）の教を抜きにしては語れないらしい。井上氏は、スミソニアン研究所がパナマで構築した生物多様性観測システムを実際にご覧になり、調査地でのフィールドステーションの確立や現地研究者の養成、研究者ネットワークの構築の必要性を痛感され、熱帯アジアに同様の仕組みを立ち上げることに奔走された。後にボルネオ島のサラワクにあるランビルヒルズ国立公園にフィールドステーションが完成した。滞在型の施設で、林冠観察用のツリータワーと調査用吊り橋（ウォークウェイ）はネットなどをご存知の方もおられるだろう。

生物多様性研究と保全に関する国際組織であるDIVERSITAS（International Program of Biodiversity Science, ユネスコが組織）の支部（DIWPA：DIVERSITAS in West Pacific and Asia＝「西太平洋アジア地域の生物多様性プログラム」）は、京大大学生態学研究センターにおかれた。多様性の保全には種に関するさまざまなデータ（インベントリー）が必要となる。DIWPAの活動の一環としての社会性昆虫インベントリーは先の井上氏の発案で、この時期から山根・橋本両氏もインベントリーやネットワーク作りの課題に取り組んだ。社会性昆虫（とくにアリ類）の研究者であった両氏は、東南アジア諸国を回り、アリ類の採集・サンプリング法、標本作製法、同定技術、標本管理法などを訪問のたびに教授された。そこで得られた標本を同定し各国に配布するという活動を続けた。アリに絞ったのは、東南アジア諸国から農業害虫・天敵・生物指標として重要なアリを取り上げてほしいという地域のニーズからだということと、アリが重要な捕食者、森林の指標昆虫の代表格であるとともに世界中で森林の生物多様性評価の重要なターゲットとして注目を浴びていたからだ。この運動のモットーは、調査・研究における先進国による収奪型から対等なパートナーシップ型への転換を明確に目指すものであった。ANeTは、当初予定の「社会性昆虫コレクションネットワーク」を多少軌道修正し、アリ研究者ネットワークとして1999年に創設された。



ANeT meeting 2017 (<http://www.antbase.net/anet/meeting-2017.html>)

ANetの最終目標

ANeT結成と両氏の活動によってアジアの国々の研究者の交流が飛躍的に高まった。援助金獲得のため欧米や日本の方ばかり見てきた研究者が隣国との情報交換や共同研究をする機運が高まった。相互の刺激と協力により、各国のアリコレクションの質・量が急激に高まった。東南アジアの研究者にとって、これまでは自国のアリの同定は至難のわざであったようだが、そこにゆけば実物（参照標本）を見ることができるようになった。日本からばかりでなく、オーストラリアやヨーロッパの研究者の積極的な参加は、ANeTの発展と質的向上に欠かせないものであったようだ。

ANeTの最初のねらいは、隔年でアジアの国々で国際会議を組織し若い研究者を交えた共同研究の場にあることにあった。事務局をマレーシア・コタキナバルのサバ大学に置き、東南アジアや欧米など17ヶ国約100人の研究者が参加。標本の画像・生態情報を含んだ分類データベースコンテンツの蓄積は充分には進まなかったが、ANeTの活動は昆虫の他の分類群のなかでも先行例としてとりあげられた。2007年からアリ専門の英文誌（Asian Myrmecology）がスタートし、インパクトファクターも0.8以上を維持し、現在では論文はまずオンラインで出版され、冊子体は年1回発行されている（<http://www.antbase.net/anet/start.html>）。

私の参加は2013年の第9回からである。前述のANeTの目標にも掲げられているが、アジア諸国の参加者、アジア以外からの参加者が和気あいあいと情報交換し、権威主義がほとんど見られない学会である。アリ研究者セミナーの開催が刺激となり、昆虫の他の分類群にも波及してってもらいたいものだ。ANeTの最終目標である生物多様性の保全（運動）に向け、社会性昆虫インベントリーと分類学トレーニングへの協力、アジア産アリ類の「参照標本コレクション」の設立を現在も継続中である。専門の分類学者ばかりでなくパラタクソノミスト（準分類学者）が育ち、標本の同定技術が向上するのを願う。

私の参加と到達点

2013年マレーシア・サバ大学では、「The tramp ant *Technomyrmex brunneus* has dominated native ants?」というタイトルで、鹿児島大学郡元キャン

パスの植物園に放浪種のアシジロヒラフシアリが侵入する前と後でアリ相がどう変化したかということについて発表した。2015年スリランカ・ケラニア大学では、「Ant community on the Campus of Kagoshima University, Japan」と題し、キャンパスにおける様々な環境（植込み、草地、建物周辺及び道路脇、実験実習農場周辺、森林、林縁部、温室）とアリの種多様性との関係について発表した。2017年インド北西部の都市パティアラにあるパンジャブ大学では、「Seasonal change in the worker activity of the tramp ant *Technomyrmex brunneus* in temperate Japan」と題し、温帯に位置する日本における放浪種アシジロヒラフシアリ働きアリの活動の季節変化について発表した。「International Conference in Zoological Sciences」と銘打ったこの会議では、招待講演、口頭発表、ポスター発表などあわせて259の発表があった。

私は、薩南諸島と鹿児島県本土に生息するアリの分布と生態について調べている。採集年と採集地はいうまでもなく、関連生態情報（営巣場所、採餌場所、餌、天敵、共生相手など）とセットであってこそ初めて活かしたデータとなりうる。広域的な分布情報を集めると同時に、いくつかの定点でモニタリングを行い、そこに生息するアリ種の動向について、これからも調べていきたい。

参考文献

- 橋本佳明・山根正気（1988）アリを狩るアリ，アリを狩るヒト [I] アジアの軍隊アリ「ヒメサスライアリ」を求めて．インセクトリウム，35（4）：4-8.
- 山根正気・橋本佳明（1988）アリを狩るアリ．アリを狩るヒト [II] インベントリーと参照標本コレクション．インセクトリウム，35（5）：16-22.
- 山根正気（1999）インベントリーと分類学者－社会性昆虫の場合－．日本菌類学会会報，（40）：58-60.
- 山根正気（2002）昆虫のインベントリーを考える．石井実・郷右近勝夫・矢田脩（編）「昆虫類の多様性保護のための重要地域 第3集」．日本昆虫学会自然保護委員会，1-8.
- 山根正気（2003）ANeT -アジアのアリ研究者ネットワーク創立に参加して．特集・東南アジアの昆虫インベントリー．昆虫と自然，38（12）：10-13.

鹿児島高等農林学校の得業記念植樹

上村 文（総合研究博物館）

表紙に写真を掲載した石碑は、2017年5月、総合研究博物館常設展示室の横に移設した鹿児島高等農林学校時代の記念植樹碑です。

ここでは鹿児島高等農林学校の記念植樹とこの石碑について紹介したいと思います。

鹿児島大学農学部の前身、鹿児島高等農林学校(以下、高農)では卒業のことを得業といい、その記念に明治45(1912)年の第1回得業以来、記念植樹を行いました。昭和27(1952)年3月の学校廃止までに高農の得業回数は40回を数えますが、そのうち得業記念として記念植樹15回・記念事業1回の記録が残っています(表1)。

第1回得業の記念樹で、現在も鹿大正門の正面に群生するソテツ(図1)をはじめ、記念樹はほとんどが、正門に入って正面にあった本館(現、農・獣医共通棟)、左手にあった講堂(現、連合農学研究

科棟)、右手にあった寄宿舎に囲まれた、学校の顔ともいべき前庭に植栽されていました(図2)。

初代校長 玉利喜造はこの記念植樹を「優美にしてかつ有益なる習慣」として『記念樹規程十則』を制定しています。

代々の三年生はこの『規程』に従って記念樹を栽植し、記録の帳簿を作成して、記念樹の管理費とともに次年度の三年生へと記念植樹の事業を引き継ぎました(図3)。

記念樹は、各科通して必ず1本に限るものと定められ、とりわけ樹種については学校の性質上、「なるたけ有益なる珍木異種」を植え置くべきとし、「かかる樹木は容易に得ること難ければ、あらかじめその樹種苗木を選定準備」し、職員・生徒が協力して「永久記念の保護継承に努」めるよう指示されています。南西諸島や九州に分布するソテツやビロウ、クロツグを除くと、記念樹はほとんど、ヒマラヤスギやセ

表1 得業記念樹一覧

得業回	得業年月日			記念樹名		栽植位置	出所/用途	写真(※※)	
1	明治	45	1912	7.11	蘇鉄 80本	[ソテツ]	本校舎正面馬車廻	肝属郡佐多農林実習場	○
2	大正	2	1913	7.11	含笑花	[カラタネオガタマ]	講堂前左方	宮里正助氏寄贈	○
3		3	1914	7.11	こるく櫨	[コルクガシ]	中央校庭	有川彌九郎氏寄贈	
4		4	1915	7.11	スズカケノキ(※)				
5		5	1916	4.1	記念事業 噴水池		本校舎右方前		
6		6	1917	3.16	蒲葵	[ビロウ]	噴水池東側	橋口及び木脇氏寄贈	○
7		7	1918	3.16	(記録なし)				
8		8	1919	3.15	桜(ソメイヨシノ※) 枯・ヒマラヤスギ		講堂東側	林学苗圃	○
9		9	1920	3.14	世界爺	[セコイア]	寄宿舎玄関前		○
10		10	1921	3.14	Swamp Tea-tree, <i>Melaleuca ericifolia</i> Sm.		噴水池北方	濠州、小出教授/轆轤材	○
11		11	1922	3.14	(記録なし)				
				7.10	『記念樹規程十則』制定				
12		12	1923	3.14	クロツグ <i>Didymosperma engleri</i> Warb.		校長室東側芝生	鹿児島市山下町旅館 薩摩屋別荘庭/観賞用	○
13		13	1924	3.14	<i>Washingtonia robusta</i> H.Wendl.	[オキナヤシモドキ]	講堂前方	亜米利加	○
14		14	1925	3.14	<i>Phoenix sylvestris</i> Roxb.	[サトウナツメヤシ]	噴水池南方	亜米利加	○
15		15	1926	3.13	ナツメヤシ <i>Phoenix dactylifera</i> L.		噴水池東側	原産地 アフリカ 輸入国名 アメリカ	○
16	昭和	2	1927	3.14	(記録なし)				
17		3	1928	3.14	<i>Schinus molle</i> Lin.	[コショウボク]	本校講堂玄関前	原産地 Tropical America 輸入国名 California	○
18		4	1929	3.14	<i>Cocos datil</i> Drude et Griseb.	[ジョウオウヤシ]	本校講堂玄関前右側	原産地 Argent.	○
19		5	1930	3.14	<i>Cocos gartneri</i> (※※)				○

『高農得業生写真帳』(明治45年~昭和12年・鹿児島大学農学部所蔵)により作成。記念樹名は『写真帳』の記載から、斜体・小文字を一部修正している。大正4・7・11、昭和2・5~年は記念樹の記録なし。〔和名〕は筆者注。

※『鹿児島高等農林学校博物同志会会報』第1巻第2号(1928)により補う。※※『開校25周年記念写真帳』(鹿児島大学農学部所蔵)に写真・樹名あり。

コイア（世界爺）といった外国産の樹木でした。

第3回（大正3・1914年）記念樹で鹿児島市内にあった実業家（有川彌九郎氏、士族出身で維新後海運業で財を成した）の邸宅から校舎中庭中央に移植された地中海原産のコルクガシの大樹（残念ながら校地の排水性が悪く、シロアリの害も重なり枯死した）や、草野嶽男教授（明治45年から大正4年にかけてフランス、アメリカに留学し果樹・熱帯有用植物を研究。初代指宿植物試験場長を務め、泉熱利用園芸の技術を確立。第3代校長）がアメリカから導入し、栽培に力を入れたオキナヤシモドキ（ワシントンヤシ）やナツメヤシといったヤシ科の植物、大正7年から9年にかけてオーストラリアに出張した小出満二教授（第4代校長）が入手した第10回（大正10年）記念樹の“*Melaleuca ericifolia*”（Swamp Teatree）（図4-1）や、第17回（昭和3・1928年）記念樹で熱帯アメリカ原産のコショウボク（図4-2）といった、当時一般にはまだあまり知られていなかった珍しい樹木ばかりでした。

当時の様子について、玉利幸次郎「父の思い出」（『玉利喜造先生伝』）には、「第二次大戦の爆撃により大半は飛ばされてしまったが、鹿児島高等農林学校の校門を入れて右手の土手に添って、椰子類の何種類かが卒業記念樹として並んで植えてあった。当時、鹿児島市内では他に椰子科植物の露



図1 第1回（明治45年）記念樹「蘇鉄」と石碑

高農創設時に佐多演習林から移植されたもので、一世紀以上もの間、高農、鹿大の卒業生の首途を見送り続けている。ソテツは校内各所に植えられ、学生・教官の研究材料としても活用された。



図2 高農前庭

寄宿舍側から見たところ。手前の噴水池は第5回得業（大正5年）の記念事業としてつくられたもの。周囲には、ピロウ（第6回）、サトウナツメヤシ（第14回）、ナツメヤシ（第15回）などの記念樹が植えられていった。



図3 昭和4年（第18回）の得業生記念写真と記念樹記録

『高農得業生写真帳』には、冒頭に『記念樹規程十則』の条文が掲げられ、各年度の記録（得業年月日・各科人員、記念樹名・栽植位置など）と得業生の集合写真が一对になって綴られている。



図4-1 (左) 高農校庭植栽の“*Melaleuca ericifolia*”標本
大正13(1924)年採集。第10回記念樹(噴水池北に植栽)
のものか。

図4-2 (右) 高農植物園内植栽のコショウボク標本
昭和10(1935)年採集。第17回記念樹(講堂玄関前植栽)
のものではない。
いずれも、鹿児島大学総合研究博物館植物標本。



図5 第18回(昭和4・1929年)記念樹写真

記念樹の*Cocos datil*(現在の学名は“*Syagrus romanzoffiana* (Cham.) Glassman”)ジョウオウヤシ(女王椰子)は、「講堂玄関前右側」に植栽との記録があるが、現存は確認できなかった。

『開校25周年記念写真帳』(農学部所蔵)には、この写真を含め13点の記念樹写真が収められている(表1)。



図6 第2回(大正2・1913年)記念樹「含笑花」と石碑
「講堂前左方」に植栽との記録がある。講堂は現在連合農
学研究科棟が建つ位置に、昭和56(1981)年まであった。
記念樹・石碑は現在、正門横インフォメーションセンター
掲示板裏にある。「含笑花」の別名をもつカラネオガタマ
(トウオガタマ)は、中国南部が原産のモクレン科オガタマ
ノキ属の常緑樹で、この記念樹以外にも鹿大キャンパスの
あちこちに植えられており、毎年5月ごろに開花する。パ
ナナのような印象的な香りを学生時代の思い出とともに記
憶する卒業生も多い。



図7 第12回(大正12・1923年)記念樹「クロツグ」(石碑なし)

「校長室東側芝生」に植栽され、現在も当初の位置にある(図9)。鹿児島市山下町(現・城山町)鹿児島城二之丸跡地の城山麓にあった旅館・薩摩屋別荘の庭から移植された。クロツグ(ヤシ科)は沖縄、奄美に分布し、花は甘い香りを放ち鮮やかな実をつける。茎を取り巻く葉鞘は黒く繊維が丈夫で、シュロと同様、刷毛やホウキ、縄などに加工され有用植物としても利用されてきた。

薩摩屋は明治末・大正期に発行された鹿児島市の観光案内に「一等」に格付けされる高級旅館として紹介されている。鹿児島出身の画家・黒田清輝も帰郷の折には定宿としており、大正3(1914)年、桜島大噴火に遭遇した際も投宿している(『鹿児島市案内記』勝野時太郎編・1910年、『鹿児島市街地図』1937年、『黒田清輝日記』東京文化財研究所アーカイブデータベース)。



図8 第4回(大正4年)石碑

石碑のみ現存。農・獣医共通棟前、玉利喜造像隣のクログネモチの木の陰にある。記念樹スズカケノキ(植栽位置不明)は、昭和2(1927)年には「枯失」との記録がある(『鹿児島高等農林学校博物同志会会報』第1巻第2号)。

地植のものは加治屋町の米人の宣教師宅と磯の集成館前と、今の磯公園内に数本ナツメ椰子があっただけであった。高等農林学校のその記念樹は卒業年次をきざんだ石と、その椰子の学名とがきざんであった・・・とあります。

『規程』の条文には、「記念樹の傍には必ず方四寸(約12cm四方)・長さ二尺(約60cm)の標石を樹て、前面には「何年卒業生の記念樹」、裏面にはその樹名、産地を彫刻するを要す」とあり、標石の設置も定められていました。現存する標石のうち、この要件を満たしているのは、当館常設展示室横に野外展示している昭和4(1929)年、第18回得業記念のものだけです(図5・表紙)。

この石碑は、当初の位置から移動し、家畜病院(昭和41(1966)年竣工、2005年動物病院に改称)の前庭にありましたが、2017年5月、同施設の改修にともない現在位置に移設、同12月解説板を設置しました。

大学構内には、この昭和4年(第18回)石碑と先に紹介した第1回記念樹・石碑(図1)のほかに、第2回(石碑とも、図6)および第12回(図7)の記念樹と、第4回の石碑(図8)が、鹿大正門付近を中心に現存しています(図9)。

本稿作成にあたっては、鹿児島大学大学院理工学研究科鈴木英治教授より記念樹の和名について貴重なご教示を賜りました。心よりお礼申し上げます。



図9 高農時代、本館校長室があったあたりから見た現在の鹿大正門付近。

左端は玉利喜造像(大正14・1925年設置。昭和59・1984年より現在位置)。鹿児島市上町で藩士の家に生まれた玉利喜造(1856～1931)は、「しっかい勉強しやいお」という西郷隆盛の言葉に遊学を決意し19歳で上京。駒場農学校(第一回)卒業後、アメリカ留学を経て、東京農林学校、帝国大学農科大学で園芸学・畜産学の教授となり、農学博士(第1号)を授与される。盛岡高等農林学校、鹿児島高等農林学校を創設して初代校長を務め、草創期の農学・農政に貢献し、貴族院議員にも任ぜられた。得業記念樹が植えられた高農の前庭は手入れの行き届いた美しい芝庭で、無頓着に足を踏み入れたりすると玉利校長から「おまんさたちゃ、ローンをデストロイすいじゃごあはんか?ローンの外い出やったもんせ!」と注意を受けたという(大正10年農学科卒業生「楽しい美しい思い出」『玉利喜造先生伝』)。

写真奥、奄美の高倉が建っている場所に噴水池(図2)があった。正面のクロツグが植えられている緑地帯には平成22(2010)年に農学部附属演習林の開山百周年を記念して屋久島縄文杉のクローン苗が植樹されている。なお、記念樹としての記録はないが、この緑地帯の一角には、昭和20(1945)年空襲時の弾痕が残るカナリーヤシ(フェニックス)があったが、ヤシオサゾウムシの被害で枯死・伐採されている(鹿児島大学総合研究博物館ニュースレターNo.9・No.12)。

参考文献

- 『玉利喜造先生伝』(玉利喜造先生伝記編纂事業会・1974年)
- 『開学五十周年記念誌』(鹿児島大学農学部・1961年)
- 『地中からみた農学部のあゆみ』(鹿児島大学埋蔵文化財調査室・2009年)
- 『あらた百年の歩み』(鹿児島大学農学部開学100周年記念事業実行委員会・2010年)
- 『旧制鹿児島高等農林学校の底力』(丹羽謙治編 鹿児島大学附属図書館・2015年)

総合研究博物館における魚類学にかかわる2017年度の研究活動

本村浩之（総合研究博物館）

鹿児島大学総合研究博物館の魚類学研究にかかわる2017年度の活動概要を研究成果、研究調査、研究発表、魚類標本に分けて紹介します。

研究成果

2017年度に総合研究博物館の教員や所属する学生によって出版された魚類学論文はちょうど100本です。魚類の分類や分布、進化、系統に関する新知見が多く出版されました。詳しい研究成果すべてをここで紹介することができませんので、2017年度に発見された15新種と11日本初記録種を以下に列記します。

2017年度に記載された新種

Stolephorus continentalis Hata & Motomura, 2018 (カタクチイワシ科) 香港・ベトナム北部

Ostichthys alamai Matsunuma, Fukui & Motomura, 2018 (イトウダイ科) フィリピン・インドネシア

Dendrochirus hemprichi Matsunuma, Motomura & Bogorodsky, 2017 (フサカサゴ科) 西インド洋に分布

Phenacoscorpius mccoskeri Wibowo & Motomura, 2017 (フサカサゴ科) ガラパゴス諸島；深海から有人潜水艇によって採集

Peristedion longicornutum Fricke, Kawai, Yato & Motomura, 2017 (キホウボウ科) ソロモン諸島やバブアニューギニアなどの南西太平洋

Sacura sanguinea Motomura, Yoshida & Vilasri, 2017 (ハタ科) アンダマン海；属名は桜、種小名は血を意味するきれいな魚（写真1）

Chromis anadema Motomura, Nishiyama & Chiba, 2017 (スズメダイ科) 琉球列島・フレンチポリネシア；カンザシスズメダイと命名（写真2）

Pempheris familia Koeda & Motomura, 2017 (ハタンボ科) 小笠原諸島；ボニンハタンボと命名

Parapercis soliorta Johnson & Motomura, 2017 (トラギス科) フィリピン

Parapercis rubricaudalis Johnson & Motomura, 2017 (トラギス科) フィリピン・西オーストラリア州

Parapercis flavipinna Johnson & Motomura, 2017 (トラギス科) フィリピン



写真1 アンダマン海で漁獲された新種 *Sacura sanguinea*



写真2 与論島から採集された新種カンザシスズメダイ。頭部にある2本の黒色線を髻に見立てて命名

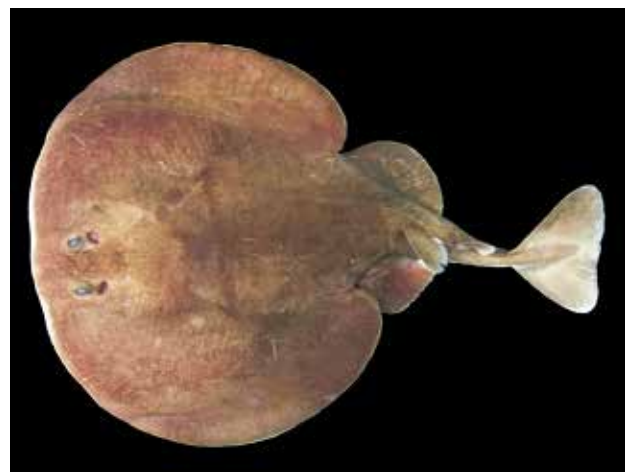


写真3 南日本に広く分布することが明らかになったツキミシビレイ。丸い体盤の形が月を連想させることに因み命名された

Parapercis caudopellucida Johnson & Motomura, 2017 (トラギス科) アンダマン海

Parapercis hoi Johnson & Motomura, 2017 (トラギス科) フィリピン・西オーストラリア州

Enneapterygius velatus Tashiro, Senou & Motomura, 2018 (ヘビギンボ科) 奄美大島・久米島；ホタテヘビギンボと命名

Epinnula pacifica Ho, Motomura, Hata & Jiang, 2017 (クロタチカマス科) 太平洋；アオスミヤキと呼ばれる魚は太平洋と大西洋に生息すると考えられていましたが、両洋では別種であることが分かり、太平洋産は新種として記載されました

2017年度に発表された日本初記録種（上記日本産新種は除く）

ツキミシビレエイ（新称）

Tetronarce formosa (ヤマトシビレエイ科)

茨城県から高知県にかけての太平洋岸・東シナ海 (写真3)

ヤブサメカサゴ（新称）

Neomerinthe erostris (フサカサゴ科)

肝付町内之浦・東シナ海・西表島

トビイシハナダイ（新称）

Plectranthias fourmanoiri (ハタ科)

与論島

ハナサキタナバタメギス（新称）

Pseudopleysiops immaculatus (ハタ科)

トカラ列島平島

キオビイズハナダイ（新称）

Plectranthias sheni (ハタ科)

伊豆大島・草垣群島・大隅諸島黒島・トカラ列島中之島・屋久新曾根・奄美大島 (写真4)

ソウリュウスカシテンジクダイ（新称）

Rhabdamia spilota (テンジクダイ科)

肝付町内之浦・種子島

セダカヒメスミクイウオ（新称）

Parascombrops yamanouei (ホタルジャコ科)

東シナ海

イワツキクロダイ（新称）

Acanthopagrus taiwanensis (タイ科)

南さつま市笠沙

ユカタヒメジ（新称）

Upeneus spottocaudalis (ヒメジ科)

南さつま市笠沙

ロケットヒメジ（新称）

Parupeneus janssenii (ヒメジ科)

肝付町内之浦

ミツダレヘビギンボ（新称）

Enneapterygius fuscoventer (ヘビギンボ科)

大隅諸島口永良部島・トカラ列島中之島・与論島・沖縄島・石垣島・西表島・南大東島

さらに、一般向けの魚類に関する書籍(編著・監修)は2017年度に以下の7冊が出版されました。2018年度には『絶滅危機動物』、『怪魚・珍魚大百科』、『ポケット魚図鑑』、『はっけん深海図鑑』、『魚類図鑑Z』、『魚



写真4 島嶼域に生息することが明らかになったキオビイズハナダイ



写真5 2017年10月に出版された鹿児島湾の魚類図鑑

類学の百科事典、『種子島の魚類』などが出版される予定です。また、2017年度に出版した『内之浦の魚たち』や『奄美群島の魚類』の第二版も出版したいと思っています。

2017年度に出版された図鑑類

『さわるな！猛毒危険生物のみみつ100 (208 pp.)』
 『火山を望む甕海 鹿児島湾の魚類 (302 pp.)』(写真5)
 『緑の火山島 口永良部島の魚類 (200 pp.)』
 『黒潮あたる鹿児島の海 内之浦漁港に水揚げされる魚たち (520 pp.)』
 『かごしま水族館が確認した鹿児島の定置網の魚たち (334 pp.)』
 『奄美群島の魚類 (414 pp.)』
 『? (はてな) に答える！生き物事典 (681 pp.)』

研究調査

2017年度はトカラ列島の悪石島(4月22～25日；写真6)、奄美群島の与論島(6月27日～7月6日)、カンボジアのシェムリアプ市(5月28日～6月3日；8月26日～9月4日；写真7)、マレーシアのトレンガヌ州(8月11～19日；写真8)に魚類の採集調査にきました。学生たちは、他にも南アフリカ共和国、アメリカ(ボストン、ニューヨーク、ワシントンDC、フィラデルフィア、サンフランシスコ、ホノルル)、イギリス、台湾、ベトナムに調査渡航しました。国内では、所蔵標本の調査や共同研究のため、山形大学、国立科学博物館、千葉県立中央博物館、横須賀市自然・人文博物館、神奈川県立生命の星・地球博物館、京都大学(写真9)、水産大学校、愛媛大学、高知大学、宮崎大学などを訪問しました。

研究発表

2017年度は国際学会や国内学会・研究会に参加し、日ごろの研究成果を発表しました。国内では、日本動物分類学会第53回大会(海洋研究開発機構)で1件、第11回水生生物勉強会(宮崎大学)で1件、第50回日本魚類学会年会(北海道大学)で15件の発表をしました(写真10、11)。日本魚類学会年会では「東南アジア諸国との連携による魚類多様性研究」というセッションを企画し、2時間の枠内で東南アジアで研究をしている方々の発表セッションの運営をしました。

2017年8月にホーチミン市で開催された国際学会「The Annual Meeting of the Asian Society of Ichthyologists」で3件の発表を行いました(写真

12)。2017年10月にタヒチで開催された国際学会「The 10th Indo-Pacific Fish Conference」には7名の院生とともに参加し、合計9件の発表を行いました(写真13、14)。筆者は国際運営委員会の委員としてタヒチでの学会運営を手伝い、さらに分類学セ



写真6 トカラ列島の悪石島での海洋生物調査



写真8 マレーシア・セティウで曳網調査



写真7 カンボジア・アンコールワット遺跡環濠の魚類相調査



写真9 京都大学にて奄美大島産標本の調査



写真10 函館にて魚類学会年会でのポスター発表（4年生の森下君）

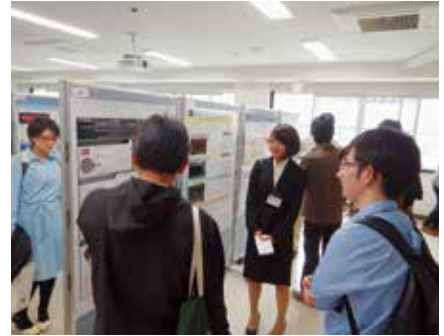


写真11 函館にて魚類学会年会でのポスター発表(院生の萬代さん)



写真12 ホーチミンにて国際学会での口頭発表（院生の畑君）



写真13 タヒチにて国際学会で口頭発表（院生の田代君）



写真14 タヒチにて国際学会の懇親会



写真15 タンザニアにて国連絶滅危惧種評価委員会



写真16 アメリカ人研究者のStuart Possさん。鹿児島大学総合研究博物館に1か月滞在しました

クシヨンの企画運営を行いました。2017年度も多くの成果を発表することができました。また、7月にはタンザニアのザンジバルで国際自然保護連合(IUCN)絶滅危惧種評価委員会が開催され、筆者はカサゴ目魚類の評価を行いました(写真15)。

魚類標本

2017年度は17,000点の新規魚類標本を作製するとともに、20,000点の魚類標本画像と15,000点のDNA解析用筋肉組織サンプルを登録しました。20名近い

学生やボランティアの方々がこれらの標本を使って研究を進めています。2017年度の国内外の研究機関への魚類標本と画像の貸出対応は65件1,000点で、同年度の主な貸出先海外研究機関はアメリカ、オーストラリア、韓国、台湾でした。また、2017年度はベトナム国立自然史博物館の研究者と学生やカリフォルニア科学アカデミーの研究者(写真16)、国内の研究機関からは18名の研究者や学生が、所蔵標本調査のため総合研究博物館を訪れました。

諏訪考古資料コレクション3ー松木蘭式土器ー

橋本達也（総合研究博物館）

鹿児島県の考古学者、諏訪昭千代さん（故人）から総合研究博物館に寄贈いただいた考古資料のうち弥生土器を紹介します。

今回紹介する土器は弥生時代、そのなかでも弥生後期、およそ西暦1～2世紀頃を中心とする時期の土器です。南さつま市金峰町尾下にある松木蘭遺跡出土資料を指標として名付けられた松木蘭式土器と呼ばれるものです。

この土器の出土地や収集時期などに関する情報は、土器本体の胴部に墨で直接書き込まれています。現状ではその墨が薄くなっており、ところどころ読めなくなっていますが、それは下記のように書かれています。

金 峰 町 □ □ □ 園

3 7 8 (15)

東 上 (阪) 恒 夫 氏

(鹿) □ 慶 三 氏 (有 地 出) 土

1行目は出土地でしょう。現在の南さつま市金峰町で、その後続く一番大事な地名が読めなくなっています。読めない三文字のうち二つは「尾下」の可能性もあるようにもみえるのですが、不確定です。

2行目は昭和37年8月のことだと考えられますが、採集年月か諏訪さんの入手年月なのかまでは確定できません。3行目にあるのが、採集者、諏訪さんに本資料を提供した人物と考えられますので、2行目の年月には両方の可能性が考えられます。ただ、諏訪さんは学校教員でこの地域の考古学者として知られた人物なので、採集から時間をおかずに連絡が入り、資料が譲られた可能性も考えられます。いずれにしてもこの土器の発見は昭和37年とみて良いと思います。

3行目は、おそらく発見者でしょう。4行目にも人物名が書かれていますが、人物名の後に「有地出」とみられる3～4文字あり、最後が「土」ですので、この人物は出土地の土地所有者と考えられます。

現状では十分な検討ができていませんが、赤外線カメラで墨書を検討するか、これら記載の人物をあたるとすれば、実際の出土地にまでたどり着くことはできそうです。今のところ、金峰町内でこの土器が出土する可能性の高いのは、松木蘭遺跡ですので、そのあたりを候補として探る必要があるでしょう。



図1 諏訪コレクション・松木蘭式土器

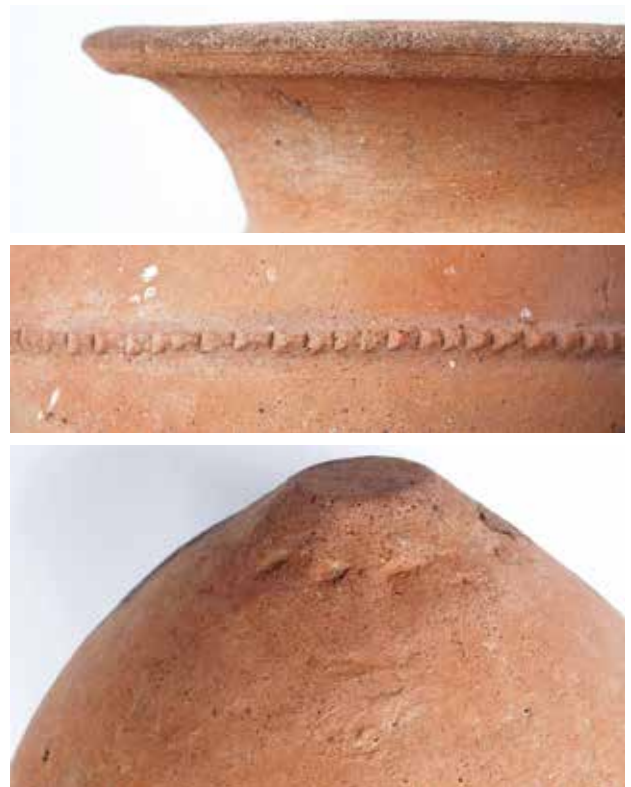


図2 松木蘭式土器細部

諏訪さんは、南さつま市加世田出身であり、若い頃を中心に現在の南さつま市域で長く考古学研究に関わっていました。松木藪遺跡はその活動範囲内にあります。

松木藪遺跡は平野に突き出した見晴らしのいい台地の上にあり、1978年以来、本田道輝氏（元鹿児島大学法文学部教授）によって6次にわたる発掘調査が行われています。この遺跡では幅4m、深さ2.5m以上にもなる直線的で深い大溝が確認され、良好な状態の土器が大量に出土しています。ここでは、本田氏の調査以前から、土器の出土することが知られていたといいます。また、この遺跡の周辺には弥生時代前期の標識遺跡で、北部九州や南島との交易にかかわる遺物の出土した高橋貝塚、北部九州からもたらされた甕棺の出土した下小路遺跡、万之瀬川の河川改修に伴って弥生終末期～古墳時代前期の大量の遺物が出土した芝原遺跡などがあり、広域交流にかかわった人々が往来した痕跡のある鹿児島を代表

する弥生時代遺跡の集中する地域です。

この土器は、壺形土器で高さ30cm、口径17cm、胴部最大径24cmです。胴部には一条の突帯を貼り付け、その上部を刻んで文様をしています。胴部下半には焼成時の焼きムラ（黒斑）が明瞭に付着しています。全体に薄くつくられており、胴部には3ヶ所、孔が開いています。

底部は小さな平底であり、また口縁部には強い横ナデによって面をつくり、頸部との境が段になることを特徴としています。

松木藪式土器のなかでも、熊本地域の黒髪式土器に近いグループで、九州西岸の交流によって土器づくりの情報が共有されていたことが考えられます。

松木藪式土器の出土する遺跡は鹿児島全体でも非常に少なく、まだまだ弥生時代後期の様相も十分にはわかっていません。ただ1点の土器ですが、本資料はほぼ完形で、松木藪式土器を代表する資料の一つといえるものであり、とても貴重です。

大正時代の顕微鏡 —七高と高農資料—

橋本達也（総合研究博物館）



顕微鏡（教員用と考えられる）



顕微鏡（学生用）



総合研究博物館では、鹿児島大学の前身校時代の資料を収集していますが、その中でも数が多いのは、第七高等学校造士館、鹿児島高等農林学校で使用された顕微鏡です。それぞれの学校で使用されたものが約50点、計100点ほどを収蔵しています。

いくつかの資料をザックリと紹介します。残された顕微鏡のうち、高等農林のものでは教員用と考えられるものがいくつかあります（写真左2点）。顕微鏡本体が立派で、箱の大きさや形にも違いがあり、また状態も良く、本来の鍵が伴っていたりもします。

一方、資料の大多数を占める学生用は、七高も高等農林のものも、同じくシンプルなつくりです（写真右2点）。また箱には何曜日何時だれが使うと、シール貼りがあります。

いずれも貴重品として大事にされてきたことで、現在まで残ってきました。道具を大事にしてきた先輩方から受け継いだ遺産です。



箱に貼られた学生の
使用予定

2017年度の活動の記録

第23回研究交流会

日本海開裂と日本列島の誕生—もう一つの物語—

日時 2017年4月17日(月) 16:30~

場所 郡元キャンパス 総合教育研究棟5階 国際島嶼教育研究センター会議室

講師 鹿野和彦氏(元 総合研究博物館教授)

第17回自然体験ツアー

開聞岳の植物観察—標高差800mの垂直分布を体験

日時 2017年4月29日(土) 9:00集合 16:00解散

案内者 鈴木英治氏(鹿児島大学理学部)・博物館スタッフ

第24回研究交流会

榛名火山爆発と火砕流により埋もれた古墳時代の人馬とムラ—群馬県金井東裏・下新田遺跡の調査から—

日時 2017年6月24日(土) 14:30~16:00

場所 郡元キャンパス 共通教育311号室(3号館1階)

講師 杉山秀宏氏((公財)群馬県埋蔵文化財事業団)

第33回市民講座

戦国時代の井伊谷と浜松の城—井伊直虎の時代—

日時 2017年7月22日(土) 14:30~16:00

場所 郡元キャンパス 共通教育311号室(3号館1階)

講師 鈴木一有氏(浜松市文化財課)

科研費成果公開研究会

X線CT×島内139号地地下式横穴墓—X線CT調査による古墳時代甲冑の研究—

日時 2017年9月9日 13:00~16:30

会場 福岡大学 中央図書館 1F 多目的ホール

橋本 達也(鹿児島大学総合研究博物館)

X線CT調査による古墳時代甲冑の研究と島内139号地地下式横穴墓の調査

河野 一隆(九州国立博物館)

X線CTの活用と次世代の博物館

阪口 英毅(京都大学大学院文学研究科)

X線CT調査による短甲の研究

鈴木 一有(浜松市文化財課)

X線CT調査による衝角付冑の研究

塚本 敏夫((公財)元興寺文化財研究所)

古墳時代甲冑の科学分析におけるX線CTの位置と展望

古谷 毅(京都国立博物館)

三次元計測・X線CT調査と古墳時代甲冑研究の課題

後援

大島海峡、いきもの新発見 写真展

日時 2017年8月6日(日)~9月10日(日)

9:00~18:00(日祝は17:00まで) 月曜休館

会場 瀬戸内町立図書館・郷土館 2F小ホール

第17回特別展

アジア熱帯植物の不思議世界

日時 2017年10月2日~10月29日 10:00~17:00

会場 郡元キャンパス 中央図書館 ギャラリーアトリウム

第34回市民講座

アジアの熱帯にみられる植物達の多様な世界

日時 2017年10月21日(土) 13:30~15:00

場所 郡元キャンパス

講師 鈴木英治(鹿児島大学理学部)